
月下の花

花戸 紗世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下の花

【Nコード】

N0898M

【作者名】

花戸 紗世

【あらすじ】

“神主になりたい”びつくりするほど体力のない高校生、七夜純の物語。モチヅキ社の社家の一人娘として生まれた私が、祖母のような神主になるため神使に苛められながらも、日々成長していくアヤカシ物語です

Moonlight

(……はあ……)

歩けども歩けども延々と緑が続く。

土臭さか、この独特の山のニオイで頭がクラクラしてきた。
多分そういう季節は花粉症の人は耐えられないだろうな…。

人並みに健康かつ田舎暮らしをして17年間、自慢ではないが大きな病気にも花粉症にもなったことはない。

まあだからと言って体力が人の倍有るわけでもなく。

逆に、身体能力にはかなり自信があるが、何故か体力は高二女子平均…も無いという…。

無意識に体育の授業とかで目立ってしまい、バスケやバレー部から勧誘を受けるも、ちよつと試合をすると分かるのだが活躍出来るのはせいぜい10分。後はもう身体が重くて言うことを聞かなくなってしまう。

…一言でいうと、ちよびつと残念な私。

そんな私がなぜ汗だくでこの山に登っているかというところ。単に夏休みだからとか、家の私有地探険だとかではない。

まあ、それも少しは理由だが。

うちの七夜家^{ななよ}は代々この山の頂上にあるモチヅキ社の社家なのだ。そうは言っても、昔はちよつと名の知れた神社だったモチヅキ社も今や参拝者もなく、内科医と二足のわらじで一応神主である父が日

曜日の日課として思い出したように掃除にいくだけというありさま。

私が生まれるかなり前に亡くなった祖母、梅子^{うめい}さんが神主をつとめていた頃はまだ荒れ果てては居なかったらしい。

と、私はなんとか頂上に着くことが出来た。

肩で息をし、初めてちゃんと社を見た私は瞬きし、首を傾げた。

「…ん？」

思っていたより…マシ？

もつと瓦がはげてたり雑草で神社が見えない！みたいな廃神社を想像していたのだが。

神社の近くをうろつきながら私は朝みた、必死に私を止めようとする父を思い出した。

『あーもう！行かないでいい！だいたいお前の体力であの山の頂上に行けるわけない！』

ムツとして言い返そうとした私を制し、母はおつとりと父に微笑んだ。

『いいじゃないの。せっかく社家の長女なんだし。見物見物。山登りは体力作りにいいのよ？』

父はしばらくニコニコする母と目で会話していたが、はぁーとため息を付いた。

『……わかった。だが言つとくが行つてもボロボロ神社しかないからな。……幸いな事に電波は繋がる。携帯持っていけよ』

とまあ、高二の娘がちよつと自分ちの山に登るだけというのにいささか過保護な父にさすがの母もあきれた顔をしていた。

…父は小学校低学年くらいの時に梅子さんに連れられてこの山に登り、何故か行方不明になった後、泣きながら山を下ってきたと親戚のおじちゃんに聞いた。

それが原因かは知らないが、父は一度も私を連れて山に登ったり神社に来たことがない。

綺麗な花が咲きそうな樹木や、大きな御神木。
春にお花見でも出来そうなのに、勿体無い。

私は御神木の影に入り、木からは少し離れた場所で母が作ってくれたお弁当を広げた。

さて、まったりしてきた所で、少し七夜家について少しまとめてみよう。

さつきも言つたが七夜は代々この小さな神社の社家。毎回、親族から神主が選ばれるのだが、時折まるでモチヅキ神から選ばれたような不思議な力を持った子供が生まれてくる。

だがその力は、大人になると無くなったり自身の能力に気づかないままだったり、重宝されるその存在はかなり稀少でもある。

“モチヅキ神の声を聴き、人外の姿を視る能力”

…梅子さんは、その力を持っていた。神使を統率し神社を護った。力の高さもさることながら前例が無いほど神使との信頼関係があり、神にも好かれていたという。

そんな力は持つていないのに神主になった父は多分母親の七光りだろう。

私はコロンと土の上に寝転んだ。

さやさやと木が風をうける。

爽やかな空気を吸い込み軽く瞼を閉じた。

…何故、ココに来たのか。

頼まれたから。梅子さんに。

私の誕生日の夜の夢に毎回必ず来てくれた。

といつても、話したりすることは出来なかったのだが幼い頃から不思議と嬉しかったのを覚えている。

いつも若い娘姿をしていたので、それが祖母だと知ったのはつい2、3年前だ。

そして、先月の誕生日の日にも梅子さんは私の夢に訪れた。

そして、初めて声を聴く事が出来た。

一方的に梅子さんが話すのを聞くだけだったが。

いつでもいいから、山を登って神社に行つて、と。

凜とした美しい容貌の梅子さんはにっこり笑って私に頼んだ。

もうそろそろ、良いと思うわ、と。

そして何だかんだと忙しくて忘れていたが、今日の朝、急に思い立った私は山に登った。

だがまあ、今のところ父の掃除の意外な上手さに驚いたくらいの収穫しかない。

まだ11時を少し過ぎたくらい。

優しい陽光にふわぁと欠伸をしてしまった私は少し考えた。

一時間くらい昼寝してもいいかなあ…。

いいよね。

リュックを枕に、私は素直に睡魔に従った。

Moonlight 2

………んん？

不自然なくらい心地よい眠りと、ポタポタ顔に落ちてくる水滴を感じ、パチツと瞼を開いた私の目に飛び込んできたのは、私を覗き込むようにして涙をこぼすやけに整った顔の男だった。

しかもここらでは絶対見かけない薄い金髪をしている。染めているのではないと分かる、自然な輝きの髪。

20代後半くらいか……？しばらくボーっと見とれていたが、時間が経つにつれどんどん頭も起きてきた。

………。

布団からむくりと起き上がった私は混乱する頭を片手で抑えた。

……取り敢えず、ここは神社の中か。

いや、それよりあの人は誰。

………。

その人のグスグスとした泣き声を背中であきながら数分がたち、私は意を決してその人に向き合った。

ハンカチを差し出しながら。

「あのう…これどうぞ、えっと、はじめまして。七夜…純^{じゅん}です」

「……え？」

ハンカチを受け取った後その人はキョトンとした表情をして少しポケツとしていたが、しばらくして軽く頷き、今度は泣き笑いの表情を浮かべた。

そしてよしよしと私の頭を撫でてくる。

一瞬身構えたが、不思議と嫌な感じはせず、触られていると心が浄化されているような…心地の良いものだった。

「あのう……？」

「…純さんというのですか。……梅子によく似ていたので驚きました。…お孫さんですね」

静かに響く声でその人は呟くと悲しげに笑った。
ペコリと私に頭を下げる。

「申し遅れました。モチヅキです」

「あ、はい」

私も慌てて頭を下げ、しばらくニコニコ微笑みあっていた。
のだが。

いたずらっ子のような顔を浮かべたモチツキが内緒ですよと言う風に指を唇に当てて微笑んだ。

「私はこの社の神です」

ぱちくりとした後、私は固まった。

「……かみさま」

…。驚いたが、すごく納得できた。

梅子さんはこの人…モチツキ神に逢うために神社に行けと言ったのか。

それにしても何故、私？

モチツキ神に逢うためだったら千夜^{ちや}の方の夢にでるべきなのではないだろうか。

千夜は父の弟の娘で、私とはいとこどうしなのだが、彼女はまさにそのチカラを持っている。

幼い頃から普通の人には視ることのできない、いわゆるオバケ、などを視た。それで親戚たちは次の神主は千夜だと言っていて彼女もかなり乗り気のようだった。

なのに…？

私の心を見透かしたように神様がクスツと笑った。

「そうですね、千夜は確かに神主候補です。でも、貴女ですよ純。気付きませんか？貴女は今、私と話をしているんです」

モチヅキ神の姿を視て、声を聴いている…？

「え…まさか。本当ですか？だって私は千夜みたいにオバケ視たこと無いですよ」

ああ、と思い出したように神様は頷いて私の額に指を当てた。

「梅子に封印されていたんですね。まあ神主になると決める前から妖を視ても意味ないですし無駄に怖い思いますし。前例もあつたし」

クスツと笑って神様は私の瞳を覗き込んだ。

「どうしますか？今回、神主候補が二人もいるという非常事態です。千夜さんと争う気はありますか？」

「…ひとつだけいいですか？……梅子さん、祖母は千夜の夢にも行っただけでしょう？」

私が言い終わると同時にモチヅキ神の墨色の瞳が面白いものでも見つけたようにキラッと輝いた。

「いいえ」

モチヅキ神は短く答えた。私にはそれだけで良かった。

「はい。私は神主になりたいです。祖母のような、神主に」

小さい頃から見守ってくれていた祖母。

これが祖母の願いだとしたら、私はどうしても叶えなかった。

につこり笑ったモチヅキ神にトンと額を押され、私は意識を失った。

Moonlight3

ガッシャーン！

また新たに物が壊れた。

ヨーコは壁にもたれながら冷ややかな視線を少女に向けた。

腰まで伸ばした黒髪が乱れるのも構わず、少女は先ほどから目につく物をすべて叩き落としている。まるで何かに憑かれたかのようにその眼はランランと暗い光を放っている。

少女はヨーコを睨み付けた。

「なによその眼は？」

「いや。…片付けようか？」

「…あんた私の神使なんでしょ？当然じゃない」

そう言う少女は部屋を出ていった。

ガラスの破片を拾い集めながら、ヨーコは薄く笑った。

千夜のあの癪癢で分かった。

…純が、とうとうモチヅキ社に赴いたようだ。となるともうチカラ

の封印は解けているはず。

さて、千夜はどうするのだろうか。

思わずククツと笑いがこぼれた。

梅子の血を引く孫娘。

千夜と純、偶然か必然か面倒なことに二人とも力を持って生まれてしまった。

幼い頃から神聖視され甘やかされ、かなりの期待を背負ってきた千夜。始めから人外の姿を感じることの出来た千夜の力と経験値には、普通に考えて及ぶはずの無い純。

昨日までは普通の人間だった純。対して幼い頃から神主になるための教育を受けてきた千夜。

純に関して梅子があこひいきしていることはモチヅキ神に聞いた。2ヶ月前、モチヅキ神の指示で千夜のそばにいたが…。

部屋を片付け終わったヨーコはごみを捨てるため外へ出た。

Moonlight 4

結局、私は数分で目を醒ましたのだが、今日はもう帰るようにモチヅキ神に言われ、なんとか山を下りた私は次の日重い身体を引きずりながら学校へ行った。

昼休み、机に突っ伏して昨日家の倉庫から引っ張り出してきた古い書物を読んでいると、学級委員の百瀬^{ももせ}さんが先生からの伝言を伝えに来た。

「純ちゃん、先生が呼んでたよ。転校生の人の事じゃないのかな、チラツと見たけど綺麗な人だったな」

どちらかと言うと目立ちたがりな彼女は、確実に学校のアイドルになるであろう転校生を最初に見ることが出来たという優越で目がキラキラしている。

「純ちゃん、私ついてこうか？」

「あ、いやいいよ。大丈夫、ありがとね」

残念そうな百瀬さんに謝り急いで職員室に向かう。

少し、昨日下山するとき妙に楽しそうに微笑んだモチヅキ神に言われた事が気になった。

『明日、貴女用の神使を行かせるのでよろしく願いしますね』

まあ、杞憂だと思っただが。
十中八九知り合いか何か……。

「あ、七夜。ちょっと遅かったな。あいつお前を探して一人で教室まで行っちゃったぞ」

今年30歳になる担任、住吉知哉すみよしともやが苦笑いしていた。ちなみにもうすぐ一児のパパになるそうだ。

「あ……ーそですか」

普通引き留めるだろ。そう心で呟きながら、私は訊ねた。

「で、その転校生って誰なんですか？」

「ん？なんだ聞いてないのか。えーっとなあ……犬井いぬい、……これなんて読むんだ？ちょっと見てみる」

「先生……国語教師じゃなかったですっけ……」

住吉先生に書類をポンと渡され、見る。

確かに読み仮名をふっていないので断言は出来ないが……。

「……心……。ココロじゃないですか？」

「お、言い切ったな。シンとも読めるだろ」

軽く首を横に振り、書類を住吉に返す。

「ココロだと思います。…あー大変。私探してきますね」

スタスタと職員室を出ようとした私に住吉先生が思い出したように言った。

「じゃあテキトーに皆に紹介しといてくれよ。お前知り合いなんだよなー？」

「了解です」

実際、知り合いと言っていいのだろうか。

相手は私の事を知っているが、私は…さっき読んでいた祖母の日記に書いてあったココロという名と…多分、あの姿の時は知っている。

急いで教室に向かっていると、まあ吃驚。

教室の中は今までに無い人口密度を誇っていた。

多分、中心にいるのは。

「あつ！純。探したんだよ」

女子をかき分けて、嬉しそうに駆け寄ってくる……フワツとした栗色の髪的美青年。

だが私には、毎日ウチの庭でのほほんと暮らしている犬にしか見えなかった。

思わずそいつの袖を引っ張って教室の外に連れ出した。

それだけではいつ女子が群がるか分からなかったので、ダッシュで中庭まで走る。

ゼーゼーと息をきらしながら、全く息のあがっていない、むしろもつと遊ぼうよ！といった感じのそいつのツルリとした頬をペタペタ触る。

「な…ナニしてんのアンタ。っていうかあんたコロよね！？どうしてこんな姿になっちゃったワケ！？」

「…いやー話せば長くなるなあ」

困った顔でコロ…いや心は頭をかいた。

ジーっと私は飼い犬の豹変した姿を見た。

流石に大型犬だけあって、けっこう背はある。

犬の時から近所の人にキレーなワンちゃんねえって言われていたが……憎らしいほど睫毛が長く、その茶色の大きな瞳を縁取っている。

母がトリミングに熱心だったからかは知らないが、髪はフワフワ。

私はがつくり肩を落とした。

「……梅子さんの日記に書いてあることは、全部本当？」

「うん。僕はモチヅキ社の神使だよ。梅子さんにずっと昔から純の事を頼まれてたんだ。時が来るまでは見守って、その時が来たら、純につけて」

優しい声で語る心に私は思わずうずくまってしまった。

「そつか……。毎日あんな狭い犬小屋でごめんね。ご飯も一番安いドックフードで今までごめんね……」

今更な気もしたが、私はまずそれを謝っておきたかった。

「えっ、いや別に大丈夫だったよ？時々パンとかお肉とかくれたし」

「それは冷蔵庫でうっかり賞味期限切らしちゃったやつだもん！！
…あー梅子さん、私たち親子は神使さんにこんな扱いしてました！」

ドーンと落ち込んでいる純に、心はちよつと笑って純の髪を撫でた。

「大丈夫だってばー。それに時々、司^{つかさ}がお酒の差し入れしてくれてたしね。一緒に呑んだりもしたし」

え、と本当に驚いて純は顔を上げた。

「お父さんが？え、なんで？もしかして全部知ってたの？」

心は、あ、とやっちゃったーという顔をしたが諦めて頷いた。

「口止めされてたんだけどね…。まあ、梅子の息子だからってのもあるだろうけど、優しいんだよ、司。僕たち神使たちにね…」

それに、と心は付け足した。

「文^{あや}さんも、僕の正体には気付いてないけど、やっぱり大切にしてい

くれたよ」

…すると、気づかず市販のドックフードやら賞味期限切れの肉やらをやっていたのは私だけという……。

ますます落ち込む私を察して、心は慌てて付け加えた。

「僕としても、おうちの経済的負担になるのは絶対嫌だったから、安く済ませてくれてとっても嬉しかったよ！」

「……本当に？」

「うん。本当本当。あ」

チャイムが次の授業始まり五分前を知らせる。

陽光のように笑った心は純に手を伸ばした。

「行く、取り敢えず学校終わってから修行開始だからね」

「修行……どんな？」

もちろん、と心はニヤツとした。

「その眼を使いこなせるようにならないとね」

Moonlight 4 (後書き)

皆さまお元気でお過ごしでしょうか。

お久しぶりです。花戸です。

実は、来週の月曜日から期末テストが始まってしまいます……。
なので再来週の月曜日から更新を止めさせて頂きます……。 (涙)
皆さま、よい夏をお過ごしくださいませ。

Moonlight 5

放課後、私は心と山に登っていた。

頂上にはモチヅキ社がある、私の家の山。

神社に行くわけではないらしく、目的地は教えてくれなかったが、ただ歩いていても暇だろうと心がついでにモチヅキ社について教えてくれていた。

「え、じゃあやっぱり千夜の所にも神使さん行ってるんだ」

「でもま、つい最近だけだね。僕みたくずっと見守ってたわけじゃない」

心は誇らしげにっこり笑う。

「うん。でもぜんぜん違和感ないね、人間になっても」

明るい茶色の髪も柔らかな雰囲気も同じ。

しいていえば、もっと年取ってると思ってた。

そう言う私に、心はちよつと顔をひくつらせた。

「えー…。あはは。あー…どこまで話したっけ。……あ、だから神主でもないタダの人に神使がつかなくて前例がなくて、ようするに50回連続宝くじが当たるほどラッキーなことなんだよ?」

純に対して限定で。

心は内緒事のように笑っていた。

「なんで？千夜もラッキーなんじゃないの？」

「僕ら神使や神様はけっこう梅子を気に入ってたから。その梅子びいきの純のほうを応援したくなっちゃうんだよねえ」

ふうん？となんとなく嬉しくて笑った私はふと辺りを見渡してゲツと眉間にシワを寄せた。

「なにこれ」

「川？あ、小川サイズだけど」

「いや、そういう事じゃないでしょ！なにこの……ゴミ」

もはやゴミにゴミが重なってまたそれにゴミが……。川というが、きつたなすぎてもう水が流れているだけ迷惑っていうか。

「なんで！？ここ一応ウチの山よね。よくわかんないけどダメでしょ」

不法投棄、不法侵入!?

ゴミを意識するとそのニオイもまた襲ってくる。

「えっと、最初にコレなんとかして欲しいんだけど……」

悲しげに笑う心を見る。

「梅子が居なくなつて、もう30年ぐらいなるからねー……」

あ、と目が見開いた。

そうか、神主の仕事なんだ。

神様にどうにかしてもらえばいいのに、と言いつつになつた自分が
恥ずかしい。

「……コクロ」

臭いに負けまいとニコツと心に笑いかけた。

「家に準備しにいこー!」

「はっ……じゅ、じゅん。ちゃんと説明なさい」

父は人間姿の心を見て、一瞬フラリと目眩がしたが、なんとか正気を取り戻した。

頬をピクピクとしながら向かいに座らせた私と心を見る。

父とは対称的に楽しそうな母が微笑んだ。

「あらゝなんか結婚のご挨拶に来たみたいねえ」

「母さんは黙ってなさい。……」

「あっちよつと待って司」

パツとスーツ姿になった心はジツと父を見た。
私はゴミ袋をとりについた。

「つかさ…いや、おとうさん」

「なっ。ほら母さんが余計な事ゆーから調子のつたじゃないか」

「お嬢さんを、僕に下さい！」

「あら、お父さんどうしましょ。多分お互い無職よ？収入ゼロだわ」

「ばっ…バカ！飼い犬に娘がやれるわけないだろう！私が聞いてるのはそんなことじゃない！…純」

「へっ！？」

大量のゴミ袋をかかえた私を父は少し怒ったような顔で見た。

「お前、神主になるつもりなのか」

「……うん。そうだよ」

フウと母がどこか悲しげに微笑んだ。

「わかった」

短くそう応えたと父は外に出ていった。
その後をスタスタ心が追う。

「……………?」

首を傾げる私に母がポンと肩を叩いた。

「軍手もいるわね。あとスコップも持って行く? あら早く着替えてらっしゃい。準備しとくわ」

「う…ありがと。ねえお母さん、心の事知ってたの?」

クスツと母が笑った。

「ええまあね。……ほら、早くしなさい」

「はあーい」

煙草をくわえながら司はがつくり肩を落とした。

「ああー…最悪だ。だいたいなんでヨーコが千夜の所に行ってたんだよ。純の苦勞がどんどん増えるぞこれから」

「えー、ネガティブだな司。でも純自体は最高だよね？」

「当然だ。俺の娘だぞ」

あや
文さんの娘でもあるしー？

司をからかいクスクス笑う心はスツと真剣な表情になった。

「大丈夫。純は梅子の愛孫だし……平等じゃないよね。今更だけども」

「母さんは啓介の嫁さん、最後まで大嫌いだったからなー……」

「……司。大丈夫、純は僕ら神使が護る。今のところ内定もらったのは純だ」

「千夜は……大変だと思うぞ」

けっこう大雑把な表現だが、まさにそうなのだろう。
何もかもが大変。

「そうだね、チカラの大きさでは純は千夜の足元にも及ばない。でも……神様も言ってたよ。純には資質があるかもって」

司はあからさまに嫌な顔をした。

「かも？」

その時、純の心を探す声がした。

「……………ま、そろそろ行くね」

きびすを返す心に司が声をかけた。

「知ってるだろうが純はかなり燃費が悪いからな、気を付けろよ」

「はあい。まあ、ある程度は体力つくってくんないとこれから困るし」

僕も頑張るよとヒラヒラ手を振る心に軽く笑い、司はまたため息を付いた。

moonlight 6

梅子さんの日記に書いてあった、心についての記述。

1、やはり犬なので、忠義心が厚い。

「ちょっとは手伝ってよ！」

私が川底に埋まったタイヤを引っ張りながら言つと、心はめっちゃ嫌な顔をした。

「えー…きつたないなあ」

2、意外と几帳面で真面目

「純、分別もちゃんとしてね。…あつ、それスチールだから！ちゃんと確認しよ」

「…わかった…」

3、プロ意識があるが、なんでも不器用。

「…ココロ、私がやるよ？」

「ううー…、悔しい…。僕いちおー神使なんだけどな…」

なだめながら心のスコップを受け取る。

埋まっているゴミを掘っているのかさらに埋めているのかわからない。

(…犬のかつこで掘ったほうがいいんじゃないのかなあ)

純は小さく舌打ちした。

4、落ち込むと泣く。

「あーあー…。僕なんにも役に立ってないよ…」

なぜか川上のほうで哀愁たっぷりの表情をしている心に手に持った空き缶を投げつける。

「ココロ…手伝って?」

夕暮れ、バッタリと草の上に倒れ込んだ純の目の前で心はキヤーと
はしゃいだ。

「うわっキレー!! あり得ないよ純すごい! まさかたった3時間で
こんな…!」

そういうとホロホロ涙をこぼしながらパシャパシャ川の水を嬉しそうに叩いている。

「……………よかったね」

なんもしなかったくせにねー。
ケツと少しやさぐれる純に心はキラキラした笑顔で純の髪を撫でた。

「ありがとう純…ほんっとに嬉しい」

「……そうっすか」

へッと呟く。

「あ、わすれてた。ごめんね純、ちょっとこっち来て」

「えゝ何？」

渋々と言われるままに川に近づく。

するとキラッと水が光り…。

「……うわぁ」

まるで水が踊っているようだっただ。
噴水のように、水が細い線を描く。
心が目を細めた。

「綺麗だね…、この川も、純にありがとうって言ってる」

「……うん」

やっと報われた気がして目頭が熱くなる。
心が穏やかに眩いた。

「……あ。純、ほら。川の主」

ん？と自分の足元を見た純は目を見開いた。

（かつ……亀！？）

綺麗な見たことない翡翠色の小さい亀。

少し躊躇したが、急いで両手ですくいあげる。
すると亀の口がパカッと開いた。

「お初にお目にかかる。梅子の孫、司の娘よ。わしはこの川に住むもの」

「……いつ……」

きゃー！と叫びそうになった自分をなんとかしずめる。
だが頭は今までに無いほど混乱していた。

（亀が……亀が……）

「ちよつと純？」

心の慌てた声にはつと我に返った。

「はっ…はじめまして…川の主さま！七夜純と申します、よろしく
お願い申し上げます」

亀を手にしたまま深々と頭を下げた。

亀は満足そうに笑い声をたてた。

「ふおっふおっ。いいお嬢ちゃんじゃの。今日の事、わしから礼を
言わせておくれ」

「はっはい。これからも頑張ります！」

「うむ、精進せえよ。昔チラツと見たが、あの黒髪の嬢ちゃんは手
強いぞ」

あ、千夜のこと。

そう思っていると、亀は早々と川に帰っていった。

心がポンと肩を叩いた。

「視えたね。さあ今日のノルマ達成！家に帰ろつか、僕おなか空い

たよ
」

亀と話した感動に浸っていた純は一気に現実にはひきもとされた。

「……ん。帰ろう」

亀と話せたし。
まあ、いつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0898m/>

月下の花

2011年10月7日00時47分発行